

まえがき

2003年11月から2005年3月にかけて、グルジア、ウクライナ、クルグズスタン（キルギス）で、市民の大規模な集会を背景とした政権交代が相次いだ。この現象は、民主化が停滞する CIS（独立国家共同体）諸国に新風を吹き込む「民主化革命」ないし「民主化ドミノ」として、マスメディアなどで注目された。また、セルビアでのミロシェヴィチ政権打倒（2000年10月）やレバノンでのシリア軍追放（2005年2～4月）と合わせて、アメリカによる世界的な民主化戦略または陰謀の中にこれらの「革命」を位置づける見方も盛んに唱えられた。

しかし、各国を専門とする地域研究者の目によるこれらの事件の具体的な検証は、必ずしも十分に行われてこなかった。また、クルグズスタン以降 CIS 諸国での政権交代は続かず、ウズベキスタンからの米軍撤退（2005年11月完了）に見られるようにアメリカの部分的勢力後退とロシアの巻き返しが生じているという新しい地政学的状況の中で、「革命」の意味を問い直す作業もなされてこなかった。本論文集は、グルジア、ウクライナ、クルグズスタンの独立以降の政治変動の中に革命を位置づけ、各国で革命後にどのような政治的發展が見られるか、そしてこれらの出来事を CIS 地域全体の中でどう捉えるべきかを検討しようとするものである。

北海道大学スラブ研究センターは、かつての（旧）ソ連研究がもっぱらモスクワからの視点によるものであったことを反省し、ロシア以外の旧ソ連諸国やロシアの地方の研究に力を注いできた。ウクライナ研究者の藤森、グルジア研究者の前田、中央アジア研究者の宇山がいずれもセンターに在籍することは偶然ではない。3人は、留学や研究調査等を通じて長期的に当該地域に滞在した経験を持ち、現地ソースに通じている。いわば土地勘を持っており、これらの国を「米露の角逐」のような国際政治上の動きの客体と見なす分析や、「権威主義から民主主義への移行」といった単線的な分析に違和感を抱いてきた。本論文集で、「民主化革命」が括弧付きとされているのはそのためである。

本研究の初期の成果として、『国際問題』誌2005年7月号では、小特集「CIS 諸国の『民主化』」が編まれた。そこでは宇山はクルグズスタンについての分析ではなく、CIS 諸国の政治変動全般に関する総論を担当した。また3人のほかに、立花優（北海道大学大学院博士課程）が、前大統領の息子の大統領就任という、革命とは対照的な形の政権交代を経験したアゼルバイジャンについての論考を寄せた。

日本国際政治学会2005年度研究大会（11月18日）では、「旧ソ連諸国における『民主化革命』の三国比較」部会が組織された。報告の題目は以下の通りである。討論者として貴重なコメントを下さった上野俊彦教授（上智大学）、司会を務められた仙石学教授（西南学院大学）に深くお礼申し上げたい。

藤森「ウクライナの『オレンジ革命』は民主化革命なのか」

前田「グルジアのバラ革命：『革命』か『禅譲』か」

宇山「クルグズスタン（キルギス）の『革命』」

本報告集の第1章から第3章までは、この時の発表原稿に大幅に加筆・修正したものである。いずれの論文でも、「革命」を国内政治のロジックから捉え直し、新旧の政権を比較することで革命の「民主化」としての側面の再検討がなされている。選挙は定期的に行われるのに民主主義が根づかない「競争的権威主義」に関する近年の比較政治学の研究動向を参照するとともに、国際政治の文脈にも十分注意を向けている。第4章では、3カ国の革命を比較することによって、それぞれの特徴を立体的に把握することを目指した。

本書が、日本におけるCIS諸国の理解と、民主化理論・政治体制論の発展の一助となることを願ってやまない。

藤森 信吉・前田 弘毅・宇山 智彦